

【人文・社会系】

研究課題名	認知発達の霊長類的基盤
研究代表者名	まつざわ てつろう 松沢 哲郎 (京都大学・霊長類研究所・教授)

人間の心の進化的基盤をチンパンジーの研究から探る

人間を特徴づける認知機能とその発達のな変化の特性を知るうえで、「それらがどのように進化してきたか」という理解が重要だ。「進化の隣人」と呼べるチンパンジーを対象に、子どもからおとなになる過程（思春期：8—12歳の時期）での認知発達に焦点をあて、知性の発達の全体像を描き出すことを目的とする。京都大学霊長類研究所の1群とアフリカのボソウの野生群を主な研究対象にする。比較認知科学の視点から、系列情報処理、概念形成、記憶、注意、情動などを解析し、「親子関係やコミュニティーのなかま関係を背景に、チンパンジーの認知機能の実態とその制約とは何か」、逆に「人間を特徴づける認知機能とは何か」を明らかにする。とくに、主たる対象となる3組の親子では、子どもが8—12歳になる時期なので、子どもからおとなへのダイナミックな認知的飛躍を実証的に捉えたい。京都大学霊長類研究所では、下記の3つの実験場面を確立し実施する。1) 社会的場面：複数個体を対象に、道具やトークンを利用した競合あるいは共同作業場面を設定する。2) 対面検査場面：検査者がチンパンジーと直接向き合って認知課題の検査をする。従来は極めて困難とされてきた8—12歳という思春期から青年期をへてフルアダルト（おとな）になる過程でも、人間と同様な対面検査が可能だという見通しができており、従来の研究にはないきわめてユニークな研究場面になる。3) 個体学習場面：1個体を対象とした「タッチパネル付きコンピュータをもちいた学習場面」で、子どもからおとなになる過程に特有の系列情報処理、記憶過程、概念形成、注意機構、情動過程のあることを明らかにする。具体的には、いつ直観像的記憶が消失するのか、階層的な認知がどこまで深まるかをみたい。さらに、従来の個体学習場面に社会的場面をもちこんで、2台のコンピュータを連動させた見本合わせ課題（2人のチンパンジーが協力して解く認知課題）を新たに設定する。研究テーマは3つに大別できる。1) 基盤となる感覚・知覚・情動、記憶、物理的因果の認識、2) 表象や概念さらには回帰的な構造をもつ思考や、クラス・関係・包摂などの階層的認知、3) 「他者の心の理解」や、共感・同情、共同・協力など、社会的知性の研究である。また、野外実験と行動観察を組み合わせた手法で、ギニアの野生チンパンジーを対象にしたフィールドワークを実施し、親子関係と道具使用（葉を使った水飲みと石器使用）の発達を検討する。ヒト、テナガザル、ニホンザル、新世界ザル、さらには霊長類以外の野生動物を対象にした種間比較を通じて、比較認知科学の視点から思考と学習の研究をおこなう。

【キーワード】

チンパンジー：学名 *Pan troglodytes*。現生種の中で最もヒトに近縁な生物である。今から約500-600万年前にヒトとの共通祖先と分岐した。ゲノムレベルでのヒトとの相違は1.23%に過ぎないといわれている。われわれの進化の隣人といえる。

比較認知科学：人間と他の現生種との比較を通じて、人間の心の進化的基盤を理解しようとする学問。

【部会における所見】

チンパンジーの認知発達を中心とした本研究は、国際的にも評価の高いこれまでの成果に基づきながら、さらに思春期以降の認知発達プロセスを、海外のチンパンジー研究グループの追従を許さない研究手法によって分析することで、その全体像を明らかにするものであり、特別推進研究にふさわしいものである。個体間の共同による課題解決の問題を、実験場面および自然の野外場面で研究する等のアプローチからは、認知発達の進化モデルをも視野においた、画期的な成果が期待できる。

特別推進研究 平成20-24年度

認知発達の霊長類的基盤

人間の心の進化的基盤をチンパンジーの研究から探る



松沢哲郎、友永雅己、
田中正之、林美里
(京都大学霊長類研究所)



- 1) 社会的場面**：複数個体を対象に、道具やトークンを利用した競合あるいは共同作業場面を設定する
- 2) 対面検査場面**：従来困難とされてきた8-12歳という思春期から青年期をへておとなになる過程でも、人間と同様な対面検査が可能だ
- 3) 個体学習場面**：1個体を対象とした「タッチパネル付きコンピュータをもちいた学習場面」
- 4) 自然の生息地でのフィールドワーク場面**：道具使用や親子関係の発達について長期継続観察をおこなう

【人文・社会系】

研究課題名	清朝宮廷演劇文化の研究
研究代表者名	いそべ あきら 磯部 彰 (東北大学・東北アジア研究センター・教授)
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">宮廷演劇から大清帝国(大清グルン)とアジアを読み解く</div> <p>中国演劇は、世界各地に根付く中国文化の一つの重要な文化的要素であり、中国人の共同体意識をはぐくむものです。中国の演劇は、1000年前に形式を整え、人間が持つ多面的な要素と行動を「仮想空間での人間社会」で演じ、人間の生きざまを眼に見える形にして表現しました。その一方で、中国の人々は絵そらごとであるとは認識しつつも、現実社会に演劇が持つ諸要素を重ね、社会で生きる手本ともするようになりました。演劇は中国の上下の人々に直接ふれることになり、中国人の意識形成に重大な役割を持つようになりました。</p> <p>中国でも演劇は娯楽性が強いものでしたが、清朝になると、娯楽性の強い演劇を国策のもとに、大幅に改め、宮廷演劇として国内・国外へ発信するようになりました。</p> <p>東ユーラシア地域は、清朝成立によって大清帝国(大清グルン)に組み込まれ、政治・文化・交易など多方面で影響を受けつつ、今日の世界に到っています。現在のアジア社会を考える時、清朝との歴史的関係は当然念頭に置くべきこととなります。そして、清朝が今日の中国社会を形づくったことを思えば、国策として重視した宮廷演劇の持つ具体的な内容や役割などを正確に把握し、清代中国社会の実像を明確にする必要があるわけです。</p> <p>中国演劇研究は、従来、文学史の枠内で社会の動向とは切り離されて研究されてきました。そのような中で、中国演劇の性格が大変換する清朝の宮廷演劇の本格的な研究は未着手の分野でした。</p> <p>本研究では、現代中国の文化や社会構造に多大な影響を与えた清朝の宮廷演劇文化を、主要な5つの視点から分析します。</p> <ol style="list-style-type: none">① 大戯と呼ばれる長編作品の内容と小説との関係、② 清朝の文化政策としての宮廷演劇の性格、③ 中国近現代の地方劇に与えた影響、④ 清朝が外国使節に宮廷演劇を見せたねらいと東アジア世界の芸能への影響、⑤ 現代中国の宮廷演劇資料の整理と出版にひそむ政治性 <p>以上の点を共同研究の形で国外の研究者の協力を求めながら、分担して研究を進めます。成果としては、大戯などの作者像の解明や改作本・異本の存在の紹介、宮廷演劇システムの地方劇運営者による吸収状況の解明、東アジア演劇への清朝宮廷演劇の反映、古本戯曲叢刊編集をめぐる政権の干与など、多方面での成果が予測されています。本研究の成果を従来の研究成果と併せることによって、清朝文化はほぼ体系的に解明され、延いては現代中国人の意識構造や社会秩序などに演劇が果たした機能が明らかとなり、本質的な中国理解が進展することになると考えられます。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;"><p>【キーワード】</p><p>清朝宮廷演劇：清の満洲人皇帝が主催した演劇文化全体を指し、北京の紫禁城内で上演されることも多かったため、宮中、つまり内府（内廷）演劇とも言う。北京の離宮や熱河離宮、江南の行宮などに大きな舞台を設けて実施した。外国使節や一般大衆にも見物の機会が与えられた。</p></div>	
【部会における所見】 <p>実証的な文献研究を根幹に据えた中国内府劇研究という視点は評価でき、特別推進研究に値する。近代中国の思想・文化・政治とも深く関わるテーマであるため、特に政治史・社会史関係の研究とどのように連携するのかを明確にし、当該研究分野の専門研究者、例えば、現地の政治史・社会史研究者の協力を求めることなどにより、昇平署档案の徹底的調査などをも加味した、多面的かつ総合的な研究の推進が期待される。</p>	

主な解明点・予想される成果

